

の「自殺説を否定された。「生きるために引き金を引いた」との見解だが、辻佐保子先生はそれを見咎め「高階さんて可哀想ね」と漏らされた。その同情の真意は不明だが、不肖当方も「永生のための死の選択」には、画家の側に厳粛な合理的判断のあったことを追認したい。それを明晰にも悟達していたのが花巻の宮沢賢治に他ならない。

またこれはサントリー学芸賞授賞式の折だったが、談たまたまOutsider Artに及び、これをデュビュッフェ提唱のArt brutと混同する昨今の風潮は論外と口を挟んだところ、美術市場との関係が正反対だからね、と即座に模範解答の反応が返ってきて、その頭脳の回転と聡明さには、改めて恐れ入った。

——直接のお弟子筋でもない一介の外野からの追憶若干に過ぎないが、学問の清々しさと学閥に囚われぬ気さくなお人柄に、改めて敬愛と感謝の念を捧げた。

アガサ・クリスティーの登場人物の委細を諳んじ、逢坂剛の欧州諜報戦取材の裏にまで通じておられた。その底知らずの学識は、私的な歓談から、公の司会進行の場まで、余人には期待できぬ知性の輝きを惜しみなく散布しつつ、しかも謙虚で自制の慎みをも自然体に兼ね備えた稀有な人格だった。大学紛争時代に連載執筆された『エラスムス』。昨年刊行された本書は、高階先生終生の、理想の自画像でもあった筈である。

ランス語に詰まると、高階氏に遠慮なく尋ねる。壇上お二人の信頼関係も、見ていて爽快だった。他方、通訳の三浦信孝さんも時にお手上げの柄谷行人氏の講演が終わるや、高階氏が「ボクにはさっぱりわからなかった」と耳打ちされた。高階合理主義はどうやら柄谷弁証法の表裏自在の修辞法とは相性がなかったようだ。

我田引水に及ぶが、写実主義の驍将クールベがカトリック教会揶揄を意図した問題作の一件がある。本作は1863年の著名な「落選者展」からも「落選」を狙った作品だ、と発言したところ、高階先生は言下に「落選者展からの落選はない」と否定される。でも、それこそがクールベの政治的演出の妙味のはず。別の機会に「音の世界が見えていない」と口を滑らすと、高階先生からはすかさず「音はもともと見えない」と見事に揚げ足を取られた。でもそれが日本語のsynesthesiaでは？ その定番『近代絵画史』が五章劈頭で論じるエドゥアール・マネの《草上の昼食》。だが、その「スキャンダル」は、実は没後に某批評家がでっち上げた神話だったのでは？ また世紀末の象徴派ポール・セリュジエがボン・タヴェンで描いた《タリスマン》。『非具象絵画への里程標』だが、この小品がナビ派の聖遺物に昇格するのは、盟友モーリス・ドニ晩年の後知恵工作。——碩学公認の世間の通説に楯突く悪童の捻くれだが、これも偉大なる先達あればこそ。

『ゴッホの眼』では「炎

と謙遜のご返答。会議場裏の事務室でほんの1時間ほどで準備を終えられていた。その後コレージュ・ド・フランスでの連続講演も拝聴したが、毎回のメリハリも効いた、理路整然たる近代日本美術史論。奥様は「もう少し時間があればって、毎回零してばかり」と内情を漏らされたが。

滑舌抜群でPrestidigitateur「奇術師」などという舌を噛みそうな難語もお手の物。プロのアナウンサー顔負けの声帯を通して、無駄なく的確な論理が、使用言語に関わりなく開陳されるのは、ケネス・クラークの『文明』NHK放映の前座説明の頃から定評だった。ダンテ『神曲』のイタリア語原文から古今・新古今、森鷗外『即興詩人』や竹久夢二の『どんたく』まで、暗唱された詩句が、適所で淀みなく即興、かつ銜いなく朗唱される。盟友の芳賀氏は「いやァ高階は昔から詩でも何でも、すぐ覚えてしまうんだ」と、幼少時から身近な学友の天稟の才を、些か呆れ顔で述懐していた。

モーリス・パンゲさんの内緒話では、若き日の留学生、高階秀爾はパリで「ナポレオン」の異名を頂戴していた、という。小柄な体格だが一頭地抜けた卓抜な見識が周囲を圧倒したからだ。留学中の奇特な出来事は、芥川龍之介顔負けの短編小説として『アルゴ』誌に残る。

1986年パリ・ボンピドゥー・センターでは『前衛の日本』が開催された。シンポジウムで隣席の哲学者・今道友信先生は、咄嗟にフ

連載

## 高階秀爾先生の極私的な思い出

Shuji Takashina in Memoriam : 05 fév. 1992 - 17 oct. 2024

京都精華大学教員、放送大学客員教授 稲賀繁美

1978年、駒場キャンパスでの高階教授「藝術論」、(改築以前の) 図書館の視聴覚教室での授業のあとのこと。透視図法について愚見を開陳した。昇降機の中だったが、成瀬不二雄さんの論文を読むと良いと諭された。江藤淳・遠山一行と共同編集の『季刊藝術』に掲載されたばかりの秋田蘭画論である。相前後して芳賀徹氏から、当時まだサンタ・バーバラ勤務だったヘンリー・スミスを紹介された。こちらは広重『名所江戸百景』をご研究の最中だった。高階・芳賀両氏がそろって山形出身者同士(名紀行文が残る)なのも知らなかったが、おふたりが『藝術の精神史』に結実する鼎談を企画運営中の時期にあたる。

パノフスキーの「象徴形式としての遠近法」所収ドイツ語原本も貸与頂いたが、毎日の読書日程が欄外に鉛筆で簡潔に記載されていた。まだ複写も不自由な時代ゆえ、手書きレポートの渡辺華山洋風山水画論の返却をお願いした。あのご多忙のなか、翌週には手ずから持参頂いたのも、冷や汗物の思い出である。

その卓越したフランス語を初めて耳にしたのは、1979年秋に実施されたジャポニスムについての初の大規模な国際研究会の折。全体講評だが「電話帳によれば東京にはルノワールという名前の喫茶店が85軒あって」、といった枕が実に有効な、明晰この上ない行き届いた報告だった。あまりに見事なのに舌を巻き、思わず賛辞を呈したが、「いや、たいしたことないよ」